

## 報 告

# オンラインロザリーに見る移民第一世代の文化・コミュニティ維持 —意義の変容—

藤本陽子\*1

キーワード：コロナ禍、オンラインロザリー、フィリピン人、コミュニティ

## 1. はじめに

2019 年末に始まるコロナ禍によって、「密の回避」のため人と人との間の物理的な距離を空けざるを得ない状況になった。ヨガ教室、授業、学会、勉強会、コンサートなど、それまで目的があって一箇所に人が集まって行っていたことが、各自の現実の場所から仮想の一つの場所に集まって行う形式となり日常化した。また実際に会えないため、人々は人とのつながりをバーチャルな世界に模索した。ZOOM 飲み会がその典型であろう。終電車を気にする必要がない、そのまま寝られるという利点は挙げられるものの、緊急事態宣言が解除されれば人々が街にくりだし盃を酌み交わす様子を見ると、バーチャルがリアルに勝るわけではないことが分かる。

宗教的集会も同様である。拙著「コロナ禍における移民第一世代の文化・コミュニティ維持への課題と可能性-オンラインロザリーの限界-」で取り上げた教会では、東京近県のコロナ感染者数の多さから1年以上公開ミサが行われず、毎週日曜日に集まっていた人々がリアルに会うことができなかった。とりわけ bonding (つながり) を重視するフィリピン人にとって、友人知人とハグ、キスであいさつをし、おしゃべりをするができない状況にあれば、バーチャルでも集まろうとするのは当然のことであろう。<sup>註1</sup> このようにミサの前後に行っていたコミュニケーションができなくなった代わりにオンラインで集まるようになる。そして単なるおしゃべりの場ではなく、彼らにとって重要である「祈り」という共通の目的があることで、その集

まりには方向性が与えられる。また教会を基盤に形成されたグループの集まりとして、現実世界でともに日曜日を過ごすことができなくなった代替の方法が、そのまま教会にあったコミュニティの維持となるのではないかという期待は持てたはずである。しかし前稿で述べたように、この集まりの参加者がコロナ禍以前のリアルなミサに集まった人々の人数よりはるかに少ない人数でしかなく、およそコミュニティ全体の維持に役立つとは考えられない状態であった。

以後世界は、変異株の出現、感染の波、ワクチンの普及しない地域などもあり未だに世界的な収束には至っていないものの、日本は2021年10月になり一息ついた感がある。日本政府も社会も教会も、コロナ禍に対する緊張から解かれ、コロナ対策は軟化の様相を見せている。そしてこのグループが所属している教会も公開ミサを再開した。

このようにオンラインでの活動を取り巻く環境が変わっていくなかで本稿は、拙著「コロナ禍における移民第一世代の文化・コミュニティ維持への課題と可能性-オンラインロザリーの限界-」で取り上げた移民第一世代(フィリピン人)のオンラインロザリーの活動のその後について報告するものである。

## 2. 2020 年下半年以降の教会の状況について

### 2-1. 公開ミサ再開への動き

感染中心地となる懸念から公開ミサを中止していた世界のカトリック教会は、参加者の人数制限をしながら2020年下半年から徐々にミサを公開し始めた。実際

\*1 至誠館大学 現代社会学部

2020年9月に、ヴァチカンが世界の教会に対して対面ミサにできるだけ早く戻るように促している。APによれば、“virtual liturgies, while useful, were no replacement for the real thing...physical presence by the faithful in churches was ‘vital, indispensable, irreplaceable.’”<sup>1)</sup> (「バーチャルな典礼は有用ではあるが、リアルなものの代わりにはならない…信仰を持っている人たちが教会に実際にいることは、『活力に満ち、欠くことのできない、代えがたい』ものである)」というのが理由となっている。このことから国、地域(教区)、あるいは小教区(個別の教会)によって、それまで閉じていた教会の扉が開かれ、公開ミサを再開する動きが見られるようになった。地域、国によって異なるが、予約制で基本的に所属教会外からの信徒の参加を認めないところもあり、アルコール消毒、換気、密を避けるために聖堂内での人との距離を空け、歌は歌わず(わずかな聖歌隊メンバーが歌うことはある)、会衆は発声しない等の対策が取られていた。しかし人数が制限されるため、ウェブ上でのミサ配信は一方で続けられていた。

年末年始に関しては、キリスト教の国々でも12月25日のキリストの降誕(クリスマス)を盛大に祝うか、1月はじめの主の公現(東方からの三博士が生まれたイエスを訪問したことを祝う)を盛大に祝うかは分かれるが、いずれにせよクリスマス休暇の時期に人々が移動し集まることは予測され、ドイツのメルケル首相がおじいちゃん、おばあちゃんとの最後のクリスマスにしないためにと人々に自粛を懇願したニュース<sup>2)</sup>は記憶に新しい。クリスマスはコロナ禍以前、信徒でも通常教会に行かない人もミサに集まっていた。そのためクリスマスイブに教会に人々が集まることは容易に予測され、2020年12月24日の深夜の公開ミサ実施は小教区での判断に任せられ、引き続きミサを公開しない教会もあった。ヴァチカンは当時、イタリアがロックダウンをしており、夜間外出禁止令の10時までに会衆が帰宅できるよう例年よりミサの開始を2時間早め、例年の100分の1の人数に縮小した公開ミサを行い、

ウェブ配信を行っている<sup>3)</sup>。

2021年になり再び復活祭の時期になると、ヴァチカンのあるイタリアはコロナの新たな感染の波により全土で復活祭のホリデー週末のロックダウンを宣言したがミサへの参加は認めており<sup>4)</sup>、ヴァチカンも限られた人数でミサを行っている<sup>5)</sup>。ワクチン接種が進み一度はマスクから自由になったアメリカニューヨーク市にある教会も、9月現在再び感染者数が増え、改めてマスク着用が叫ばれるなか、人数制限を行い、聖歌隊の歌はなく1名のカンター<sup>註2)</sup>のみが歌う状態でミサを行っているということであった。

いまだパンデミックが収まらないなかでカトリック教会が従来とは異なる形でも公開ミサの再開に踏み切った理由として、前述の信徒が実際にその場にいることの意義のほか、“... some Catholic priests claimed coronavirus lockdowns that shuttered churches infringed on religious liberties,” (「司祭の中にはロックダウンが信教の自由を脅かしていると訴える司祭がいること」)<sup>6)</sup>、困難な時に必要とされる教会の社会的役割、先に述べたようにヴァチカンの公開ミサ再開の意向やその他教会側の理由もあるだろうが、信徒側もオンラインではない対面のミサを望んでいたことがある。ミサは4部で構成されており、そのうち1部を除けばオンラインでも可能である。しかしその1部の構成要素の物理的な部分を重要視する一定層の信徒にとって、オンラインミサはそれに応えることができない。異国にあって母国のオンラインミサの視聴が可能となった時代にあっても、実際のミサへの参加を望むのはそれがあるからである。その残りの1つの部分とは「感謝の典礼」と言われ、聖体拝領というキリストの最後の晩餐を記念し、聖体となったパンを皆が食す行為を含むものである。<sup>註3)</sup> この感謝の典礼はミサの中で3番目の典礼となっており、ミサ全体の後半の終わりであることもあるが、コロナ禍以前のミサでも信徒の遅刻はこの聖体拝領前までであり、早退もほとんどの場合が聖体拝領後である。それほどに信徒にとって重要なものであることが

窺える。

## 2-2. 公開ミサを行っている教会

ではコロナ禍で公開ミサを行っていた教会は、どのように行っていたのか。筆者は緊急事態宣言の期間ではない時期に、東京教区で公開ミサを行っている教会2箇所のミサに参加した。1箇所が2020年11月である。ハロウィンは自粛対象となり、クリスマス、年末コロナの波が来るだろうと予測する人もいたが、社会的には人々が活動を再開していた時期である。訪れた教会は一日に行われるミサが1回だけの教会であった。入口では信徒台帳に基づいた名簿と来訪者を照合していたが、名簿にない筆者も入ることができた。体温を測り住所氏名を記入し、手指消毒をして聖堂に入る。間隔を空けて座るようになっており、ミサ前に聖堂内で会話をすることは忌避され、会衆はミサ中歌わない、祈りを唱えない、つまり無言状態で、聖体拝領で司祭の前に行列を作るときには、教会の係がアルコール消毒液を再度手に吹きかけ、ミサの終わりのアナウンスでミサ後立ち話をせず直ちに帰宅するよう促され、ミサが終わると人々はまたたく間にいなくなった。

もう1箇所は2021年春の緊急事態宣言が発出されていない時期の3月である。世は花見の季節で人々が外出を始めていた。訪れた教会は大きな教会（大きいというのは建物の大きさのことではなく信徒数が多いという意味）で土曜日と日曜日合わせて数回ミサがある教会である。筆者は土曜日（土曜日の夕方から日曜日と同じ内容のミサになる）に参加したが、参加者が予想以上に少なく、規定以上の間隔を空けて人々が座り、歌を歌わず祈りも唱えず、聖体拝領前には各人が持参したアルコールで手指を消毒する、あるいは備え付けのアルコールを利用する形式を取っていた。ミサ後は各自で自分が使用した座席を沈黙のうちに消毒し、それが終わると去った。むしろ町中のほうが花見の人出で混雑していた。このように、教会では人々がコミュニケーションを取る機会はなく、公開ミサを行ってい

る教会でもまだ以前行っていた活動もできない状況が続いていた。

では、筆者のように他の公開ミサを行っている教会にフィリピン人が行くかという、ミサがあっても日本語であれば参加しようとはなかなかしない。彼らにとってミサで使用される言語は大事なものである。また他教会で英語やタガログのミサがあってもそれは毎週ではないことが多く、行った先に知り合いがいなければ一人で行くことはほとんどないようである。

## 2-3. 公開ミサ全面停止、そして再開

4月12日に岐阜県の教会がクラスターとなったニュースが流れた。原因はその前の日曜日のイースター（復活祭）を祝う場で会食が行われたことによるという。<sup>7</sup>また9月2日にはこれもカトリックではないが大分の教会でクラスターが発生している。これはマスクを外して歌を歌っていたことが原因とされ、県内最大のクラスターと言われている。<sup>8</sup>このように2020年に海外の教会で問題となった教会での活動によるクラスター発生が、日本国内でも見られるようになってきている。そのような第5波と言われるコロナ感染状況の悪化から、東京教区は8月16日から9月12日まで再び公開ミサをすべての教会で行わないことを決定した。<sup>9</sup>つまり、それまで条件を設け限定的にでも公開ミサを行っていた教会が全て扉を締めることになったのである。教会での人々の集いと活動がコロナ感染予防に相反するため、日本の教区によっては公開ミサを自粛すべきと責任者が判断するところとなったのである。

9月末になり、東京での緊急事態宣言が解除され、東京教区も公開ミサ再開を公表した。それによれば、1メートル以上の距離の確保、十分な換気が可能な聖堂のみの公開ミサの再開、さらに信徒にはミサ後速やかな退堂、聖堂内での会話の自粛が求められている。また、消毒、マスク着用はもちろんのこと、会衆の声に出して歌う、祈るという行為、聖堂外においても飲食を伴う行事の自粛が求められている<sup>10</sup>のは緊急事態宣

言前と同様である。

東京都、埼玉県の新規感染者数が激減し、教区が対応方針を打ち出すなか、オンラインロザリーのメンバーが所属する教会も10月に、およそ1年3か月ぶりに公開ミサを再開することになった。ただし、参加にはその教会の信徒であること、2回目のワクチン接種後2週間以上経過していること、あるいは直近木曜日以降のPCR検査結果が陰性であることが条件づけられており、ワクチン未接種者は参加せず、また条件をクリアしても信者でない家族や友人、ワクチン接種のできない層を伴うことがないため、参加者は大人のみで参加者数は少ない。

### 3. 世界規模でのオンラインロザリー

2021年もヴァチカンでは教皇主導のロザリオの祈りを行っている。これは5月が聖母マリアの月となっており、ロザリオの祈りをする月間であるからである。昨年同様コロナの終息を祈る世界規模のロザリオの祈りをオンラインで行ったが、形式はヴァチカンで行うのではなく世界の国々を回るマラソン(リレー)となった。<sup>11)</sup>

アレティアによれば、5月1日に「ロザリオの祈りのマラソン」がローマ教皇から始まり、その後教皇が祝福した30の特別なロザリオが世界各地の30の聖母マリアに関連する教会に送られる。毎日その教会が順にその日特に祈る対象(高齢者、貧しい人、コロナで大切な人を亡くした人、医療従事者等)のためにロザリオの祈りを行い、31日に祈りの主権がヴァチカンに再び戻るといふものである。各国での祈りの様子はヴァチカン時間午後6時にその様子を配信する。1日はヴァチカンとイギリス、2日ナイジェリア、3日ポーランド、4日イスラエル、5日韓国…と地理上の遠近は関係ない順序で行われている。<sup>12)</sup>ちなみに日本では5月21日長崎の浦上教会被爆マリア小聖堂で行われた。<sup>13)</sup>

### 4. 教会コミュニティグループのオンラインロザリーの変容

先に触れたように、本稿の対象となるオンラインロザリーのグループの所属する教会は、2020年夏から2021年9月まで英語の公開ミサを中止していた。一方で2020年後半の社会的環境は自粛疲れ、あるいはリモートワークから以前の出勤形態に戻るなど、以前の生活習慣に戻る動きが見られ、さらにまた政府もGo Toトラベルを実施するなどコロナ対応が軟化した。それに伴いメンバーの生活も忙しくなり、当初より参加者数が減ったのは前稿で述べたとおりである。さらにそれに伴い以前には時々参加のあった第二、第三世代も学校が始まり、夜の活動であるオンラインロザリーへ顔を出すことも参加することもできなくなり、第二世代、第三世代といった世代の広がりも期待できなくなった。また、オンラインロザリーが終わると毎回写真を撮っていたのが、生活が戻ったことで夜は疲労しており、顔出しを嫌うようになり、ビデオコールであるにも関わらず、ほとんどのメンバーがビデオをオフにしている状況となった。

一般社会では人々が外出するのをあまり避けなくなったとは言え、メンバーが一般社会で会うことは稀で引き続き自粛状態が続いていたようである。そのようななかオンラインロザリーは週4日のペースで継続していたが、11月に人間関係の問題から発起人が突然脱会した。そしてその発起人は教会コミュニティの中心人物であったため、脱会すれば公式なグループではなくなりグループ名から教会名を外すことを要求するという、コミュニティ維持という意図を持って始められたグループ活動の根幹を揺るがす事態となった。そして発起人とともに脱会する者が現れ、グループが縮小し、そのような事態でも継続しようというメンバーでその後も続いている。

グループ名については、話し合いのなかで「自分たちはその教会の一員であり、他の教会ではないから」ということで名前を変えないことになったが、そこに

コミュニティ維持という考えはなく、メンバーの活動が私的な一活動グループだという主なメンバーの認識が顕著になった事件だった。

2020年に行ったアンケートでこの活動にいつまで参加するかと問うたときに、9人中「ミサに参加できるようになるまで」と回答した人は1人だけで、「オンラインロザリーが続く限り」という回答者数6人と比べると非常に少なかったことから分かるように、メンバーにとってオンラインロザリーはミサ再開とは関係ないゴールのない活動として受け止められている。また発起人の、教会での活動が不可能な時期にコミュニティを維持するという意図はこのときまで伝わらず、発起人の脱会によりミサがない期間のコミュニティ維持のためという大義は失われた。

## 5. オンラインロザリーを継続する原動力

発起人とメンバーとの間の意識のギャップについて前節で述べたが、ではメンバーはどのような意識でいまだにオンラインロザリーを続けているのか。なぜロザリオの祈りをオンラインで行っているのか。メンバーのなかで週4日行われるこの活動に活動開始からほぼ欠かさず参加し、祈りを主導する立場である Maria さんにインタビューした。

Maria さんは、母国フィリピンにいたときには教会に通う暇もなかったが、日本に来てから教会に通うようになったという。ロザリオの祈りの仕方もフィリピンにいたときには知らず、日本に来て他の敬虔なフィリピン人（幼いころから教会に通い、祈りに詳しい）に教えられた。年齢もある一定の年齢に達し仕事も減り時間ができたため自分にできることは何かないかと考えていたときに、人々のため世界のために祈ることであると思いたち、2020年の始めに同じ市内に居住する近い世代のフィリピン人3人で夜オンラインでロザリオを祈り始めたという。

ここでのメンバーが、教会名を冠するオンラインロザリーのグループの週4日の活動にジョイントしたの

である。そしてその後も近所のグループの週3日のオンラインロザリーは続けられているという。つまり、Maria さんは一週間毎晩祈っているのである。一人では祈らないのかという筆者の問いに、一人でもいいが、一人ではないので続けられるという答えが返ってきた。彼らの祈りの原動力は世界、知人、友人、家族のために祈ること、そして継続の原動力はグループだということである。

その他、異なる国に暮らす家族とオンラインロザリーを行っている例もある。彼女の場合は、コロナを機にロザリオを祈る世代である母国にいる母親が主導し、複数の国々に居住する子どもたちと時差という障害を越えてオンラインでロザリオの祈りをを行っているという。コロナ禍にあつて、異国に居住する家族の安全を確認し、絆を保つためにオンラインでの祈りが生かされているということであろう。

## 6. 公開ミサ再開後のオンラインロザリー

前述のように、2021年10月から、このグループが所属する教会の公開ミサが条件付きでありながら再開された。オンラインロザリーは日曜日はミサの時間に合わせ、また午後3時の祈りにも間に合うように午後2時から行われていたが、主導する立場にあるメンバー、その他メンバーの半数以上がミサ参加の条件に適合しておりミサに参加するため、ミサが行われる午後2時台に恒常的にオンラインロザリーを行うことが実質不可能となった。以前は突発的に午後実施できなかった場合は他の曜日同様夜に時間を移し行っていたが、しかしミサ再開後の最初の日曜日はオンラインロザリーが行われることがなかった。その後も日曜日は参加者数は不安定で夜に行われたり行われなかったりしている。

ミサとオンラインロザリーの関係性はないという認識だったメンバーだが、公開ミサの再開が彼らの生活サイクルを変化させ、あるいは生活サイクルがコロナ禍以前の状態に戻ったことで日曜日の夜に時間が取れ

なくなったこと、あるいは日曜日の夜に行わないこともあり得るという意識が変わったことが、ミサとオンラインロザリーに関係があったことを明らかにしている。

## 7. おわりに

前稿では予測し得なかったことが起こり、教会の名前を冠しながら教会コミュニティとは関係ない活動であることが明らかになったこのグループも、メンバーが重なるため、ミサ再開に伴う教会コミュニティとしての活動が再開されたことで、少なからず日曜日は影響を受けている。メンバーには、いまだミサに参加することのできない人もいるため、今後も日曜日のオンラインロザリーは規模が小さいまま存続するかもしれない。あるいは規模を維持するため他の曜日で代替するのか、オンラインロザリーのメンバーすべてがミサに参加できるようになったときどうなるのか、また他の曜日にどのような影響があるのか、大義は失ったがコミュニティ維持に一役買う余地はあったのか、そしてコロナの終息を祈ることが目的のこの活動が今後のコロナ感染状況でどのように変わっていくのか、今後も観察、調査、検証を続けていきたい。

最後に、筆者をこの活動に参加させてくださっているグループの皆さん、インタビューに答えてくださった方に謝辞を述べたい。

### [註]

註 1 ベトナム人コミュニティも同様に、オンラインでロザリオの祈りを行っていることが、オンラインパネルディスカッション「コロナ禍の今、教会のミッション」(カトリック東京大司教区災害対応チーム)においてドン・ボスコ オラトリオによって報告されている。

註 2 カンターとは先唱者であり、歌で先唱すること。聖歌隊と一緒に歌うこともあるが、聖歌隊とは別の役割を持つ。

註 3 教会によっては、聖体となったと言われるパンを食べるだけでなく、イエスの血となったと言われるワインも飲むところがあるが、子どもには飲ませられずまた回し飲みになるため行わないところも多い。

### [引用文献]

- 1) AP News (2020.9.13) 「Vatican urges return to in-person Mass as soon as possible」  
<https://apnews.com/article/virus-outbreak-italy-religion-vatican-city-pope-francis-be8a63799903683c6bb83a71689ed840> (アクセス日 2020.9.13)
- 2) Ame Delfs and Raymond Colitt 「Merkel Pleads for Christmas Sacrifice to Protect Loved Ones」『Bloomberg』2020.12.9  
<https://www.bloomberg.com/news/articles/2020-12-09/merkel-pleads-for-tougher-virus-curbs-to-fight-stubborn-outbreak> (アクセス日 2021.12.9)
- 3) Laurel Wamsley 「At The Vatican, A Christmas Eve Mass Shaped By The Pandemic」『npr』2020.12.24  
<https://www.npr.org/2020/12/24/950116293/at-the-vatican-a-christmas-eve-mass-shaped-by-the-pandemic> (アクセス日 2020.12.24)
- 4) Sabina Castelfranco 「Vatican Readies for Easter, Again with No Crowds」  
[https://www.voanews.com/a/europe\\_vatican-readies-easter-a-gain-no-crowds/6204109.html](https://www.voanews.com/a/europe_vatican-readies-easter-a-gain-no-crowds/6204109.html) 『VOA』2021.4.3 (アクセス日 2021.11.4)
- 5) The Holy See (2021) 「Holy Week 2021」  
[https://www.vatican.va/content/vatican/en/special/2021/settimana\\_santa\\_2021.html](https://www.vatican.va/content/vatican/en/special/2021/settimana_santa_2021.html) (アクセス日 2021.11.4)
- 6) AP News (2020.9.13) 「Vatican urges return to in-person Mass as soon as possible」  
<https://apnews.com/article/virus-outbreak-italy-religion-vatican-city-pope-francis-be8a63799903683c6bb83a71689ed840> (アクセス日 2020.9.13)
- 7) 岐阜新聞「イースター行事で発生の変異株クラスタ

一が拡大 100人規模で食事 岐阜県内で14人が  
新型コロナウイルス」 (2021.4.11)

<https://www.gifu-np.co.jp/news/20210411/20210411-60703.html> (アクセス日 2021.4.12)

8)FNN プライムオンライン(2021)「教会で県内最大の  
クラスター 45人が感染 マスク無しで合唱の人も  
大分・別府市」<https://www.fnn.jp/articles/TOS/233657> (ア  
クセス日 2021.9.3)

9)カトリック東京大司教区(2021)「東京教区におけるミ  
サ公開の自粛について」

<https://tokyo.catholic.jp/info/diocese/42677/> (アクセス日  
2021.8.14)

10) カトリック東京大司教区(2021)「2021年10月1日  
以降におけるステージ3の対応」

<https://tokyo.catholic.jp/info/40770/> (アクセス日 2021.  
10.18)

11) VATICAN NEWS(2021)「Pope opens Marathon of  
Prayer with Rosary in Vatican Basilica」

<https://www.vaticannews.va/en/pope/news/2021-05/pope-opens-marathon-of-prayer-with-rosary-in-vatican-basilica.html>

(アクセス日 2021.5.2)

12)Aleteia (2021)「These 30 shrines will lead the Rosary  
Relay for end of the pandemic」

<https://aleteia.org/2021/04/28/these-30-shrines-will-lead-the-rosary-relay-for-end-of-the-pandemic/>

(アクセス日 2021.08.30)

13) カトリック長崎大司教区(2021)「【5月21日終了し  
ました】5月14日更新 新型コロナウイルスの世界的  
流行の終息を願うロザリオの祈り ライブ配信のお知  
らせ」<https://www.nagasaki.catholic.jp/?p=9750> (ア  
クセス日 2021.9.8)

[参考文献]

1) カトリック東京大司教区(2020.11.18)「教区災害対  
応チームによるオンラインパネルディスカッションが  
開催」<https://tokyo.catholic.jp/archbishop/diary/40668/> (ア  
クセス日 2021.11.18)

2) カトリック東京大司教区(2020.11.15)「パネルディ  
スカッション『コロナ禍の今、教会(わたしたち)の  
ミッション』動画

<https://tokyo.catholic.jp/info/diocese/40644/> (アクセス日  
2020.11.15)

3) Vatican News(2021)「Pope to conclude Marathon of  
Prayer with Rosary in Vatican Gardens」

<https://www.vaticannews.va/en/pope/news/2021-05/pope-to-conclude-month-of-prayer-with-rosary-in-vatican-gardens.html> (アクセス日 2021.11.13)

4) Thomas Reese (2020.4.22)「How social distancing may  
change the way we do church」『National Catholic Reporter』

<https://www.ncronline.org/news/coronavirus/signs-times/how-social-distancing-may-change-way-we-do-church> (ア  
クセス日 2021.10.15)

5) Emerson Sena de Silveira (2020)

「“CATHOLICOVID-19” or QUO VADIS CATHOLICA  
ECCLESIA: the Pandemic Seen in the Catholic Institutional  
Field」『International Journal of Latin American Religions  
(2020)』(4), 259-287

6) 藤本陽子(2021)「コロナ禍における移民第一世  
代の文化・コミュニティ維持への課題と可能性-オンラ  
インロザリーの限界」『至誠館大学研究紀要』  
(8), 165-172